

令和 四 年度

四天王寺東高等学校入学試験問題

国 語

注意 答はすべて解答用紙に書きなさい。
句読点も一字に数えます。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

さて、科学って何でしょう？ わからないことがあれば辞書をひきなさい、といつも学生に言っているので、とりあえず岩波書店の広辞苑こうじえんで調べてみました。「観察や実験など経験的手続きによって実証された法則的・体系的知識。また、個別の専門分野に分かれた学問の総称」とあります。いろいろな観察や実験をして、その個別なことから、法則や体系的な知識、すなわち、正しい考え方や論理を導き出す、というのが科学ということになりそうです。

どの時代に科学が成立したかというのは難しい問題なのですが、それほど昔のことではありません。おおよそ16世紀から17世紀と考えるのが妥当とされています。地動説を唱えたガリレオ・ガリレイや、血液Aジュンカンを発見したウィリアム・ハーヴェイといった名前を聞いたことがあるかもしれません。どちらも、自らが考えついた仮説に基づいて、簡単な実験をおこなって普遍的な法則を導いた人です。そういった人たちが活躍したのがその時代です。近代科学は、その頃のヨーロッパにおいて「発明」されたもののなのです。〔中略〕

科学的というと、正しくて確固たるもの、というBインショウがあるかもしれませんが。現代の科学は相当に進歩していますから、そう考えるのも無理はありませんし、おおむねそれがかまいません。しかし、かつては、今となっては、とんでもないとかいえない考え——「トンデモ説」ともいえる考え——が大まじめに信じられていた時代もあったのです。もちろん、そういったトンデモ説がいつまでも信じ続けられることはありませんでした。それは、いろいろな観察や実験がおこなわれて、次第にトンデモ説に対する反証が積み重ねられ、多くの人がどうもおかしいぞと思うようになっていったからです。

おかしいぞという人がどんどん増えてくると、トンデモ説は破綻はたんをきたしてしまします。そうなると、その説が捨てられて、新しい、そして、より正しそうな説へと移り変わっていきます。もちろん、すべての学説がそういうようにしてできあがってきたわけではないのですが、歴史的に、そういうような例がいくつもあるのです。

① コンセンサスという言葉があります。日本語では、意見のCイチ、とか、合意、と訳されます。政治では、よく「国民の合意をとりつけた」とかいう言い方がされますが、いろいろな考えの人がいて、たくさんの方の政党があることからわかるように、政治的なことについて完全に国民の合意を得られることなどほとんどありません。

政治的なことについて、完全な合意がなされる、P、なされたと政府によって解釈される、というのは、むしろ恐ろしい状況です。第二次世界大戦前の日本や、ナチスがDタイトウした時代のドイツのことを考えてみればわかるように、言論弾圧や戦争などといった恐ろしいことの引き金になる可能性が十分にあるのです。

それに対して、科学というのは、コンセンサスを得やすい分野です。それは、科学は、

で遅らせたのではないかとも言われています。

しかし、その考えの方が正しいのではないかという研究成果——すなわち《Ⅰ》に対する反証です——が徐々に蓄積していきます。そんな時代の中に登場したのがガリレオです。ガリレオは、望遠鏡による観測で、木星の周りに四つの衛星があること、すなわち、木星もその周囲を回る星を持っている、ということを見ました。これによって、地球が宇宙の中心であるという天動説に決定的なダメージを与えたのです。

最終的にはもちろん地動説が認められたわけですが、一発ですんなりいったわけではないのです。コペルニクスとガリレオでは90歳くらい歳が違いますから、コペルニクスの考えが出されてからパラダイムが入れ替わるまで、かなりの年数がかかったことがわかります。パラダイムというのは、非常に強固なもので、②少々の反論があっても、都合のいい言い訳を編み出してパラダイムを守るため、その反論を跳ね返してしまいがち。しかし、さらに反論がどんどん積み重なっていくと、いよいよもたなくなつて、最終的にその説が破綻し、初めてみんなの考えが変わるのです。

科学哲学という分野があつて、科学とは何か、とか、科学の方法とかを考える哲学です。その分野で有名なひとりにトーマス・クーンという人がいます。そのクーンが、ここで簡単に紹介したように、科学というのは、あるパラダイムが次のパラダイムへと転換する「パラダイムシフト」によって進歩するのだという考え方をとりいれました。この考えは『科学革命の構造』という本に書かれているのですが、学説が破綻して次の学説に進むというのは、確かに、社会における革命に少し似たところがありますね。

みんなが信じ込んでいるパラダイムであっても、間違えている可能性があるということとはわかつてもらえたでしょうか。ある意味では、科学は、みんなが当たり前と思っていることに対して疑いを持つということによって進歩してきた、という言い方もできるのです。だから、科学では、みんなが信じている考えだからといって《Ⅱ》にしな

い、ということが大事なのです。

(仲野徹「科学者の考え方——生命科学からの私見」より)

問1 〓線AとEのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 次の一文は、文中の【W】と【Z】のうちどこに入りますか。最も適切な所を一つ選び、記号で答えなさい。

パラダイムというのは、それほど強力に時代を覆い尽くしているものなのです。

問3

P

R

に入る言葉として適当なものを一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ言葉を二度以上用いてはならないものとします。

ア あるいは

イ けれども

ウ すなわち

問4 —線①「コンセンサス」について、各問いに答えなさい。

(1) 政治において完全にコンセンサスがとれることの危険性は、どういふ点にありま
すか。「……点。」という文末表現に続くように、本文中より三十五字以内で抜き出
して、最初と最後の五字ずつで答えなさい。

(2) 科学的な真実についてコンセンサスをとる時に注意すべき点とはどのようなこと
ですか。それを説明している次の文の空欄に入る言葉を二十五字以内で答えなさい。

真実とされていたものが、ということ。

問5 《 I 》に入る言葉として適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 天動説 イ 地動説

問6 —線②「少々の反論が……跳ね返してしまいます」について、コペルニクスの
例で説明した次の文の中の空欄に入る言葉を、指定された字数で本文中より抜き出
して、それぞれ答えなさい。ただし、1は最初と最後の五字ずつで答えなさい。

コペルニクスが1 三十字以内
は、2 五字 を正当なものとして、コペルニクスの考えを退けた。

問7 《 II 》に入る言葉として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 驚おどろづかみ イ 牛うしの涎よだれ ウ 猿さる知恵 エ 鶉うの呑み

問8 科学の進歩はどのようなことが契機になると筆者は考えていますか。その説明を
している次の文の中の空欄に入る言葉を、指定された字数で、—線②の後の本文
中より抜き出して答えなさい。

真実と思われている学説に対して 五字以内
ことが、科学の進歩の発端
となる。

二 次の文章は、『源氏物語』をイギリス人東洋学者のアーサー・ウェイリーが英語に訳したものを日本語に訳したものです。場面は浄めの儀式（葵祭）での行列にゲンジが参列することになったところです。登場するアオイはゲンジの妻で、妊娠しており、ロクジョウはかつてゲンジと恋仲であった高貴な女性です。文章を読んで、後の問いに答えなさい。

浄めの儀式の当日、巫女には、定められた人数のプリンスや貴公子が付き添いました。パレス中から見目麗しい最高の人たちを選ぶようエンペラーは心を砕き、式服の色やズボンの模様、鞍まで決められます。ゲンジもお付きに加わるよう、特別な命が出されませんでした。人びとはこの壮麗な行列を何としても見ようと、特別馬車を早くから仕立てています。第一区のハイロード沿いは見たこともないほどのごった返しよう。割り当てられた狭いスペースに、波のように人が押し寄せ、沿道には贅を尽くした棧敷席が設けられています。その欄干からこぼれ落ちる艶やかなマントやシヨールも **A** をのむ華やかさ。 **B** を奪われる光景でした。

アオイは、このような催しにはふつう出掛けませんし、ましてやいまの体調では外に出て楽しむことなど夢にも考えられません。しかしお付きの侍女たちが取り巻いて騒ぎ立てるのです。

「**C** 行きましょうよ、マダム！ わたしたちだけ、隅っこに追いやられて見物するのは面白くありませんわ。プリンス・ゲンジを一目見たくて、大勢の人が詰めかけて。ほら、どこの者とも知れぬ、粗野な輩も山から下りて来ていますし、もつと遠くの田舎からも、妻や子を連れて、都へ押し寄せているのですよ。ゲンジさまとは何の縁もゆかりもない者まで、遠路はるばる来ると言うのに、当の奥方さまご本人がお出ましにならないなんて！」

これを耳にしたアオイの母宮も、加わりませぬ。

「アオイ、ちようど加減も良くなったところでしょう。少しは元気をお出しなさいな。侍女たちもがっかりしますよ……」

直前になってアオイは思い直し、では見物に出掛けましょう、と言い渡します。もう間際で、晴れ着を纏う時間はありません。

馬車を停める場所もすでにぎっしり。アオイの一行は何台もの馬車です。連ねて入りこむ隙間などありません。それでも大貴婦人の多くが、確保していた良いスペースから馬車を下げ、アオイに譲ろうとします。

中でもひときわ目立つ、バスケット造りの馬車が二台ありました。古風な造りですが、身分の高い人が用いるカーテンが掛かり、その裾から奥ゆかしくこぼれるドレープは（袖であれ、スカート）の裾やスカーフであれ）つましやかながら、とりどりに美しい色合いで、カーテンと重なり合っただけで見事です。①お忍びの高貴な方に違いありません。その馬車を動かす番が回って来ましたが、御者は指一本動かす気配もありませんでした。

「D 譲らねばならぬような方ではないぞ」

断固として、身動き一つしません。双方の若い馬丁の中には、もう酒が回っている者が幾人もいます。喧嘩けんかつ早くなくて抑えが利かず、分別ある年長のぜんく前駆たちが、なんとか止めようとはしますが、聞く耳を持ちません。

二台の馬車はロクジョウ妃のもの。このところの思い煩いわづらのき気散じになれば、とお忍びで来ていたのです。誰と知れぬよう、嚴重に注意していましたが、アオイのお付きはすぐに気付く「その馬車をぞんざいに扱ってはならん」「近衛大将の奥方の身分を振りかざして、アオイさまは高飛車だ、と言われるぞ」と御者らを大声で制します。ところがこのとき、ゲンジの下仕えたちが小競り合いに加わってきたのです。お付きを見て、相手方がロクジョウであることに一瞬躊躇ためらいますが、ロクジョウには加勢しないことにします。

こうして援軍を得たアオイ側が最前列を勝ち取りました。一方のロクジョウ側は、荷馬車や軽馬車など、下々の雑踏の中に押し返されてしまったのです。見物に来たのに行列は何も見えないばかりか、用心を重ねていたのに素姓すじょうが知れた挙句、**故意**に（と彼女は確信したのです）辱めを受け、身を切られるようです。馬車のかじ棒も壊され、平民の馬車の車輪にもたせ掛けねばなりません。ああ、なぜ、こんな忌々しい群衆の中に出て来てしまったのだろう。ロクジョウは胸に虚しく問い掛けます。すぐに帰ろう。行列を待つなど無意味なこと。けれども雑踏に阻まれ、馬車は前にも後ろにも動かせません。その場から逃れようとロクジョウがあがいていると、向こうから歓声が挙がりました。行列です。決心が鈍ります。ゲンジが通るまでは待ちましよう。

ゲンジはロクジョウを見もしません。見るはずもないのです。群衆は、結んでは破れる奔流ほんりゅうのように、彼の傍らを、閃き過ぎていくのですから。わかつてはいてもロクジョウは傷つきました。

沿道に並ぶどの馬車も、華やかな今日の祝祭のために、輪飾りなどで賑やかに飾られています。胸躍らせた女性たちは、留守邸にとり残されてはつまらない、と満員の馬車にさらに乗り込み、溢れんばかり。向こうから見えようと見えまいと、ブラインドの間から、外を通る貴公子に微笑を送ります。するとなんと、時折はちらと視線を返したり、振り向いたりしてくれるではありませんか。

アオイの一行は、大人数でとても目立ちました。ゲンジは通り過ぎるときに馬首をめぐらせ、ていねいな挨拶を送ります。次々列をなして通る馬上の人は、誰もがアオイの馬車の前で止まり、恭うやまつしく敬礼します。遠く隅に押しやられ、そこからすべてを見せつけられたロクジョウは、屈辱に身も世もあらぬ思いです。

「垣間見たお姿は、**E 急流**に映る影のようなもの。ついに、惨めな我が身を思い知るときが訪れました」

影をのみ 御手洗河のつれなきに、身の憂きほどぞ いとど知らるる

そう眩くと涙が零れそうになります。でもこんなところを召使いなどに見られてはなりません。涙を堪えます。そして、ゲンジの栄華の姿を目にしたことに悔いはない、と
思うのでした。

「中略。その後しばらくしてアオイは原因不明の病に苦しめられる。人びとは悪霊が取り憑いているのではないか、と噂する。」

一方、悪霊は凄まじい勢いを盛り返し、またもアオイをひどく苦しめます。レディ・ロクジョウの生き霊の祟りだ、という噂は、ロクジョウ本人の耳にも達します。また亡き父君の霊が、彼女に代わって復讐をしている、との噂も聞きました。ロクジョウはアオイへの気持ちに胸に問いますが、そこにあるのは、深い悲しみだけ。彼女への憎しみはもう、いっさいないのです。とはいってもあんなにも苦悩に焼きつくされた魂のどこか奥底に、憎しみの炎が潜んでいないとも限りません。

ゲンジを愛し、苦しみ抜いた歳月、地上にこれ以上の苦しみはない、と思ってきました。あれほど傷つけられ、心が打ち砕かれたことはありません。すべては、あの忌まわしい車争いから――。辱められ、**F**存在を否定されたのです。そうです、浄めの儀式以来、ロクジョウの心は荒れ狂い、引き裂かれ、打ちのめされ、ときに自分の思いさえ**③**御しがたくなるのでした。

ある晩のこと。

彼女はその晩も苦しみ悩んでいましたが、気づくと夢を見ていました。

娘が一人、広く立派な部屋に伏せています。それがプリンセス・アオイと、自分はわかっているようです。そして目覚めているときならばありえない、思いも寄らぬ激情に駆られ、横たわる人の腕を手荒く掴むと、ベッドから引き摺り出し、打ちすえていたのです。以来、同じような夢を幾度も見ました。

ああ、恐ろしい！ 人の魂は、本当に肉体をさ迷い出て、気が確かなら許すはずのない感情を噴出させるのです。人というのは（と彼女は思います）、他人の良いところではなく、悪いことばかりあげつらつて、悪意ある喜びを見出すもの。**G**このような話は恰好の噂の種、万一知れたらどんなにみな喜ぶでしょう！ 死後、亡霊になって敵に付きまとうのはよく聞く話。死んでからでさえ、悪鬼のごとく、毒と悪意に満ちた人と思われて、名望は失墜してしまうのです。

「ましてや **H** うちに、生き霊となってこんな恐ろしい罪を犯したとなれば、わたしはどうなることか」

ロクジョウはいま、**I**自分の運命と向き合わねばなりません。永遠にゲンジを失ったのです。なんとしてもあの人を忘れなければ。なんとかして彼を想わないように、と心に言い聞かせますが、そう思うたびに、また一層ゲンジへの想いは激しく募るのでした。

（A・ウェイリー『源氏物語』毬矢まりえ・森山恵訳より）

※馬丁……馬の世話や馬の口取りを仕事とする人。

※前駆……馬などに乗って行列を先導する人。

※気散じ……いやな気分を発散させること。気晴らし。

問1 〓線①〓③の意味として最も適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

①「お忍び」 ア 人に知られないようにこっそり行う

イ 前もって念入りに準備をして備える

ウ つらいことでもがまんして耐える

エ 他と異なるように美しく着飾る

②「故意に」 ア 結果的に イ ついに

ウ 何度も エ わざと

③「御しがたくなる」 ア 許せなくなる イ 思い通りにできなくなる

ウ 信じたなくなる エ 理解できなくなる

問2 〓線A・Bの【 】にそれぞれ漢字一字を入れて慣用句を完成させなさい。

問3 〓線C「行き」を謙譲語に直しなさい。

問4 〓線D「譲らねばならぬような方ではないぞ」とは、どういうことですか。説明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 乗っているのが誰かわかると不都合なので、誰とわからないようにわざとごまかしているということ。

イ 誰にも知られぬように来ている人なので、他の人は気づかないふりをしてほしいということ。

ウ この馬車に乗っている人は身分が高く、他の人のために場所を移動するような人物ではないということ。

エ 気分がすぐれない中せっかくやって来たため、自分たちが他の人たちよりも優遇されるべきだということ。

問5 〓線E「急流」は何をたとえた表現ですか。これより前から漢字二字で抜き出しなさい。

問6 —線F「存在を否定された」とはどういうことですか。説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分は生きているのに悪霊であるに違いないと噂され、自分の深い悲しみは誰もわかってくれないということ。

イ 馬車を身分の低い者たちと同じ場所にまで追いやられ、ゲンジにも気づいてもらえなかったということ。

ウ 華やかな周囲に比べ自分は落ちぶれ目立たない存在であり、ゲンジに微笑を送っても返してもらえなかったということ。

エ 遠路はるばるゲンジを見るために出かけたのに、たくさんの人たちに邪魔され思うようにできなかったということ。

問7 —線G「このような話」とは、どのような話ですか。解答欄に続くように二十文字以内で説明しなさい。

問8

H

に入れるのに最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まだ生きている イ 名望が失墜しない

ウ 目が覚めている エ 深い悲しみの

問9 —線I「自分の運命」の説明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゲンジへの想いに苦しめられていることに耐えられないので、何としてでもゲンジに自分の想いを伝えよう。

イ 自分が生き霊となってしまうた事実を受け入れ、ゲンジへの想いを断ち切って今後は生き霊として生きていこう。

ウ さまざまな悲しみや苦しみのために意図せず生き霊となってしまう自分を振り返り、悩みを断ち切らねばならない。

エ 自分は恨んでなどいないということをアオイに伝え、生き霊となって苦しめたことを許してもらわないといけない。

問10 『源氏物語』の作者として正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 清少納言

イ 紫式部

ウ 松尾芭蕉

エ 小野小町

三 次の文章は『宇治拾遺物語』の一節です。読んで、後の問いに答えなさい。

大和国に竜門りょうもんといふ所に、聖ひじりありけり。住みける所を名にて、**① 竜門の聖とぞ言ひ**

修行僧がいた。

ける。その聖の親しく知りたりける男の、明け暮れ鹿ししを殺しけるに、**※ 照射**といふこと

をしけるころ、**A** いみじう暗かりける夜、照射に出いでにけり。

ひとく

鹿を求めありくほどに、目を合はせたりければ、「鹿ありけり」とて、押し回し押し回

視線を合わせたので、

松明を振り回し振り回

しするに、確かに目を合はせたり。矢比やしろに回し取りて、火串ほぐしに引きかけて、矢をはげてしするうちに、

矢の届くほどの距離に近づいて松明を火串に引っかけて、矢をつがえて

射むとて、弓振り立て見るに、この鹿の目の間あひの、例の鹿の目の **B** あはひよりも近くて、射ようとして、弓を振り起して見ると、

普通の

目の色も変はりたりければ、**②** あやしと思ひて、弓を引きさしてよく見けるに、なほあ

やしかりければ、矢をはづして、火取りて見るに、鹿の目にはあらぬなりけりと見て、

起きば起きよと思ひて、近く回し寄せて見れば、身は一ぢやうの皮にてあり。「なほ鹿な起きるならば起きよと思つて、松明を近くに回しながら寄つて見ると、身は確かな鹿の皮である。」

り」とて、また射むとするに、なほ目のあらざりければ、ただうちにうち寄せて見るに、

法師の頭に見なしつ。**③** こはいかにと見て、おり走りて火うち吹きて、「**中略**」見れば、

④ この聖、目うちたたきて、鹿の皮を引きかづきて、添ふひ臥したまへり。「こはいかに、

引きかづつて、

かくてはおはしますぞ」と言へば、ほろほろと泣きて、「わぬしが制することを聞かず、こうしていらっしやるのか

おまえが（私の）止めるのを聞かず、

いたくこの鹿を殺す。我鹿われに代はりて殺されなば、さりとも少しはとどまりなんと思へ
殺されたなら、いくら何でも

ば、かくて射られんとして居るなり。口惜くちをしう射ざりつ」とのたまふに、⑤この男、ふ
こうして射られようとして
残念ながら（お前は）射なかった

しまろび泣きて、「かくまでおぼしけることを、あながちにしはべりけること」とて、そ
これほどまでにお思いになっていることを、

こにて、刀を抜きて、弓たち切り、※胡籐やなぐひ皆折り砕きて、※髻もてじり切りて、やがて聖に具し

て法師になりて、聖のおはしけるが限り、聖に使はれて、聖失せたまひければ、またそ

こにぞ行ひてゐたりけるとなん。

修行して

※照射……夏の夜、木陰にかがり火をたいたり、火串たいまつに松明をともしたりして、近づ
く鹿を射る獵法。

※胡籐……矢を入れて背中に負う道具。

※髻……頭の上で束ねた髪。

問1 ——線A「いみじう」、B「あはひ」の読み方を現代仮名遣い（すべてひらがな）
で書きなさい。

問2 ——線①「竜門の聖とぞ言ひける」について、

(1) なぜこのように呼ばれることになったのですか。二十五字以内で説明しなさい。

(2) ——線①に用いられている、助詞「ぞ」と助動詞「ける」によって確認できる文
法上の法則を何といますか。その名称を答えなさい。

問3 — 線② 「あやしと思ひて」とありますが、なぜこのように思ったのですか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 男が目の色を変えてさがしていた鹿が、普通の鹿にはありえないことに、男の近くまで寄って来たから。

イ 男の目の前にいる鹿が、男が矢を射ようとしているのにもかかわらず、逃げ出さないから。

ウ 男が松明をにかけて見ると、鹿の目が普通の鹿のものとは違っているのに、皮だけは鹿のものであったから。

エ 男が矢を射ようとして見た鹿の目の位置や色が、普通の鹿のそれとは異なっていたから。

問4 — 線③ 「こはいかに」の意味として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア こわいなあ

イ これはどうしてだ

ウ 子どもはどうした

エ 今度は何だろう

問5 — 線④ 「この聖、目うちたたきて、鹿の皮を引きかづきて」というようにしていた理由として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 聖が制止しても男が鹿をたくさん殺すので、聖は、自分が鹿の身代わりとして犠牲になってもやめさせたいと思ったから。

イ 男が聖の忠告を聞かずに鹿を殺すので、聖は照射をやめさせる方法を考えていたが、それを実行する前に男が照射をやめたから。

ウ 男が残虐な鹿の殺し方をするので、あわれに思った聖が殺された鹿になりすまして、男の鹿猟をやめさせようと思ったから。

エ 聖の注意を無視して男がたくさんの鹿を殺すので、犠牲になった鹿に代わって、聖が男を殺してやろうと思ったから。

問6 — 線⑤ 「この男」は、この後に何をしましたか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 照射への興味を失い、聖に伴われて法師として修行させられることになった。

イ 刀と弓を折って武士の身分を放棄し、法師となって聖とともに修行を続けた。

ウ 鹿猟から手を引いて法師になり、自分を使ってくれた聖が死んでも修行を続けた。

エ 照射をやめて法師となり、聖のもとで修行をしたが、聖の死と共に修行をやめた。

問7 『宇治拾遺物語』は説話文学です。同じジャンルの作品を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 徒然草

イ 平家物語

ウ 奥の細道

エ 今昔物語集